

松江城研究の最前線 ～わかったこととこれからと～

松江城部会長 山根 正明
(松江市文化財課)

はじめに

松江城と城下町松江に関しては、長い研究史と厚いその成果の蓄積があります。ここでは、近年の調査と研究の成果をかいつまんで報告することとします。ただ基調報告とは言うものあくまで概要ですし、いわゆるトピックを取り上げたものでしかありません。この後のお三方の報告によって、さらに詳しい内容と、その調査と研究成果の意味するところ、さらには他の城郭や城下町との比較検討、あるいは調査と研究の深化による今後の解明の見通しなどをご理解いただきたいと思えます。



したがって、ここでは、三人の報告される分野については重複を避けて簡略に、報告に含まれない分野、つまり文献史料や歴史地理学的方法による成果、あるいは開府以前の自然景観や土木史的分野についてはややていねいに報告することとします。

1. 宍道湖・大橋川・中海とその周辺

開府以前の松江地域については、ひなびた水辺の村里といったイメージが広く信じられていましたが、文献史料や古絵図による研究の深化によって修正を迫られています。

既にこれまでも、明代の『日本図纂』に安来や平田とともに「白潟」が記載されているところから、中国や朝鮮半島にまで知られた内海港であったことは認められていたところでした。また、『松江市史』編集委員長である井上寛司島根大学名誉教授によって、中世の西日本海水運の構造と、その中に占めた美保関の役割や重要性も既に指摘されていたところでした。^(注1)

こうした先行研究に加えて、宍道湖と、大橋川を経て中海につながる内海水運、さらにこれに連なる河川水運に光が当てられてきました。その結果、佐陀水海や古松江湖など潟湖(湖中湖)の広がる景観と、その周辺のいたるところに形成された港津の存在も浮かび上がってきました。たとえば、宍道湖北岸の平田や佐陀江・満願寺江、大橋川西端の白潟や東端の馬潟、中海南岸の八幡津や出雲江あるいは安来、中海東岸の弓ヶ浜半島の外江や米子、などはその一例です。さらには、これらの港津の間を、細川幽齋が佐陀より平田まで乗船したという「湖水の小船」が結ぶ光景も同時に明らかにされています。^(注2)

そうした中で、宍道湖と中海をつなぐ大橋川の咽喉部ともいべき白潟と末次には、それぞれ砂州が形成されていました。南岸の白潟砂州は元山(床几山)の裾から北に向かって伸びており、北岸の末次砂州は荒隈山の裾から東に向かって形成されました。つまり、南北の両岸には途中の離れたT字型に砂州が形成されていたわけです。そしてそれぞれの東部には広い水界が広がっており、北岸のそれは古松江湖と呼ばれています。

さらに、北岸には島根半島の三坂山山地から伸びた宇賀丘陵が、逆T字型に末次砂州に向かって突き出していました。この低丘陵の上に築かれたのが末次城であり、現松江城であるわけです。また、南端

に荒隈城が築かれた荒隈山も、同様に三坂山山地から宍道湖に向かって伸びた低丘陵です。

2. 開府以前の白潟と末次

白潟の売布神社に伝わる「明応四年(1495)正月八日 松浦道念寄進状」^(注3)によりますと、白潟には「両目代」と「にし・ひがしおとな中」のいたことがわかります。一般に、目代は、租税を徴収して取りまとめたり、町を代表して他との紛争の調停に当たったりした町の有力者を言います。おとな(乙名・大人とも)も、住人を代表する有力者をさす呼び名です。したがってここから、15世紀の末の時点で白潟には東西二つの町場が形成されていて、二人の目代とそれぞれの乙名たちが町の運営の中心を担っていたと推測できます。

なお、この寄進状は、松浦道念が、米十四俵で買い取った三ヶ所の土地を、子孫の繁栄を願って売布神社に寄付したものです。ここで特に注目したいのは、道念がこの寄進行為の確認と保証を「両目代」と「にし・ひがしおとな中」に求めていることです。おそらく白潟の町は、二人の目代とそれぞれの乙名たちをリーダーとして、自治的に運営されていたと考えられるのです。

そして、こうした力量は、当時のことですから軍事的な実力を裏付けとしていたと推定されます。そして、白潟の町の有力者は守護の京極氏やその後継者となった尼子氏との結びつきを強くしていたらしいのです。そのためか、雲芸攻防戦(1562～1566)の初期には毛利方の本城氏による放火攻撃を受けています。尼子家復興戦(1569～71)においても、「白潟衆」は尼子勝久方として毛利氏の兵糧輸送を阻もうとしたのですが、毛利勢に撃退されたことがわかります。

なお、新出の「松浦文書」^(注4)の分析が進めば、松浦氏の性格と活動を含めて、白潟だけにとどまらないさらに豊かな地域史像が描かれるものと期待しています。

松浦道念田地寄進状(売布神社文書)

白方御はしひめきしん申下地之事
合六百文しり、在所ハ一所か口ミ 一所なへかた
右彼下地ハ、代物十四俵ニ永代かい申候てきしん申候、
かやうニ仕候上者、我らかしそん悉はんしやうニ御ま
ほりあるへく候、若 公方事又わたくし事何事にても
候へ、うりけんのむねニまかせて、両目代又にしひか
しおとな中より御はたらき候て、末代御きしんあるへ
く候、仍永代きしん状如件

明応四年正月八日

道念(花押)

「明応四年正月八日 松浦道念田地寄進状」

橋北の末次地区については、平安末期より東福寺領末次荘（保）が成立していました。末次荘（保）を基盤としたらしい末次氏は、雲芸攻防戦の初期に毛利方に転じて、末次森分のほかに元のごとく「市屋敷」を安堵されています。したがって、末次荘内にも市場集落が形成されていたと見られます。

また、毛利氏がこの地域を制圧してからのことですが、河村又三郎が白潟・末次・中町の磨師・塗師・鞘師・銀細工などの「司」に任命されていることも注目すべきでしょう。つまり、大橋川を挟む両岸には武器の製作に携わる職人たちがいて、毛利氏は河村又三郎を通じてそうした職人集団を取り込もうとしていたことがうかがえます。

このように、橋で結ばれた白潟と末次は、開府以前にすでに市場機能に加えて船荷の荷揚げや保管といった港湾機能、さらには刀鍛冶や銀細工などの高度な技術者集団の住む、両岸が一体化した町場を形成していたと見てよいでしょう

なお、歴史地理の分野では、「堀尾期松江城下町絵図」（以後「堀尾期絵図」と略称する。同図については後掲の松尾報告と山上報告の付図を参照されたい）の史料批判が行われて、信頼して利用できるようになったことは特筆されるべき成果です。この史料は、島根大学附属図書館に架蔵されている絵図ですが、その史料性についてはこれまで幾分疑問が呈されておりました。つまり、堀尾期の制作ではなくて後世の成立ではないかということです。この疑問の背景には、松江城周辺や奥谷あたりの街路が現在のそれとあまりにも酷似していること、逆に天神川より南の雑賀町周辺の街路が南北方向の縦型として描かれており、現在の東西方向の町割りとは90度異なること、などがあげられておりました。

島根大学では、高安克己元副学長を中心に絵図に関する専門家を集めて検討されましたし、絵図に使われている和紙（上質の雁皮紙が用いられている）に対して、放射性炭素年代の測定も導入されました。その結果、制作年代として1600年代はじめの2～30年間のいつ頃かという可能性が最も高いという結果が出ました。

もともと、「堀尾期絵図」は家臣の屋敷配置を記した屋敷割り図です。したがって、これに記載された堀尾氏の家臣の没年から、既に島根大学の松尾寿名誉教授によって元和6(1620)年から寛永10(1633)年の間の成立という説が提唱されておりました^(注5)が、それと符合する結果ともなりました。また、松江歴史館の西島太郎学芸員は、料紙に残された角筆の凹線からこの絵図の制作工程を復原し、堀尾忠晴の時期に作成された原本（清書図）そのものと判断されています。^(注6)

なお、雑賀町周辺の縦型の町割りについては、堀尾期における足軽屋敷の配置計画であって、後世、おそらくは松平期になって横型の町割りとして新たに整備されたものと考えられています。

もとより絵図ですから、後の時代になって一部分が加筆されたり修正されたりしたという可能性がないとはいえません。したがってなお詳細な検討は必要ですが、「堀尾期絵図」は開府当時の、具体的には堀尾忠晴段階の松江城と松江城下の景観を描いた絵図として今後のさらなる分析と活用が待たれるところです。

3. なぜ松江か 水の恵みとその活用

このことについて松江では、堀尾吉晴と忠氏親子が元山（床几山）に立って城地を選定したとき、吉晴が荒隈山を推したのに対して忠氏は亀田山（末次城の故地）を主張して意見が食い違ったが、忠氏が早世したために、吉晴は息子の遺志をくんで亀田山に松江城を建設したという伝承が市民に広く信じられています。しかし、はじめに松江ありきではなく、出雲・隠岐の両国を支配する拠点としての居城と城下町の場所を様々な視点から広く検討したものと思われる。そうした検討を経た上でやはりこの松江を選定したのは、前項で述べたような宍道湖・大橋川・中海という出雲国を東西に貫く水の大動脈

かって二筋の低丘陵の間を自在に蛇行しながら南下していたのでしょう。

いっぽう、宍道湖の湖水は、南方から伸びる白潟砂州によって遮られますから、吐出口としてはその北端しかありません。そこへ北方から流下した山水が流れ込むのですから、その先端部分に砂州が形成されたのでしょう。そして、その川口は東側にL字型にねじ曲げられ、さらに砂州を東方へと成長させていったものと考えられます。末次砂州の成因とその成長は以上のように推測することができます。

もちろん、末次砂州が成長して河口を東へ東へと移動させると、白鹿山付近を北端とする集水域から流下した山水はまずは途中で滞留して低湿地を形成します。これが「堀尾期絵図」には「ふけ田」（湿田）と表記されている地域で、現砂子町から黒田町に広がる標高が1mを下回る低地にあたります。

したがって、西側の外堀にあたる四十間堀はこのような低湿地を利用して開削されたものでしょう。つまり四十間堀は、北方から流下した山水と、周囲の低湿地からの浸出水を蓄える貯水池の役割を果たしています。そして、さらにこれを京橋川（南側の外堀）へと誘導する機能を持たされていました。

ただ、土木史的に特に水理学や河川工学から見ると、白鹿山付近を北端とする集水域の山水の全量を、四十間堀を経て京橋川へ誘導し、さらに京橋川を通じて古松江湖に落とすことはできないのだそうです。^(注7) つまり、簡単に言って、あふれ出る水は「ふけ田」はもとより武家地をも浸水させてしまうようなのです。

ここに、宇賀丘陵を切断するという大工事が行われた理由があります。つまり、北方から流下する山水をじかに古松江湖に排水する必要があり、そのために宇賀丘陵を掘削して水堀（いわゆる北堀で、この部分では松江城の内堀と外堀が一体化している）を掘る必要があるというのです。現状でも、宇賀丘陵沿いの北田川と中川の流量はほとんど北堀が受けて排出しているのです。

もとより宇賀丘陵の切断工事は、北方の白鹿山あたりから丘陵伝いに松江城を攻撃しようとする敵に対抗する大規模な堀切の機能も持たせたものでした。この土木工事によって、江戸時代の軍学者の言ういわゆる「陽山」に改造したわけです。なお、宇賀山を掘り崩したとありますが、丘陵の山頂部（ピーク）ではなくて宇賀丘陵の鞍部を掘り切ったものと思います。

さらに、四十間堀から北堀、そして京橋川という幹線となる水堀に加えて、北田川と京橋川を南北につなぐ米子川は東側の外堀を構成するものでしたし、幹線から派生して本丸と二之丸を取り囲む内堀や、内中原には中堀も掘られました。そのような水堀の開削によって、内山下はもとより田町や内中原の武家地の複郭化がはかられたのでした。

なお、こうした鳥瞰図的な松江像に対して、織豊系城郭の成立から近世城郭への発展という城郭史のなかに位置づけて分析する視覚も重要です。織田信長が安土城を築城したのを最初として、信長とその後継者である豊臣秀吉自身と配下の武将たち（言うまでもなく堀尾吉晴は秀吉子飼いの大名の一人）によって、石垣を巡らし瓦葺きで高層の礎石建物のそびえる城郭が築かれます。礎石建物と瓦、石垣の三要素をセットで備えた城郭を、中世の山城に対して織豊系城郭と呼んでいます。シンポジウムのコーディネーターを務められる中井均氏は、この織豊系城郭^(注8)という概念を、最も早く明確に打ち立てられた研究者です。

なお、この視覚からは、同時期の他と比較した松江城の縄張の特徴はもとよりですが、たとえば堀尾氏による浜松城や富田城の改修と松江城との連続性や断絶、出雲国内で支城として整備された三刀屋尾崎城や赤名瀬戸山城の特徴、あるいは破城を含めた堀尾氏の城郭政策、石材を初めとする大量の資材の確保や労働力の編成など、解明すべき幾多の課題が残されています。

4. イメージの修正が必要か 天守の再調査とその意義

松江城の天守については、昭和25年から30年にかけて行われた解体修理にあたって詳細な記録がとられて報告されています。『重要文化財松江城天守修理工事報告書』^(注9)がそれです。これをていねいに読み解くことによって、解体修理直前の天守の構造や施工の状況を知ることが出来ます。

ところが、最近の調査によって、当時は注目されなかった事実に光が当てられました。それは、松江城の国宝化を推進するために設けられた松江城調査研究委員会の神奈川大学西和夫教授を中心とする建築史部会の調査による成果で、要約すれば、天守の旧観は望楼部が現状より狭く造られていたということです。つまり、後世、東西方向に切妻屋根が張り出されて現状のような外観になったということです。

私たち松江に住む者にとっては、松江城天守こそが天守建築のスタンダードになっています。つまり、各地に現存する天守を見る場合はもちろん、復原天守や古写真などでしか見ることの出来ない天守に対しても、無意識のうちに松江城の天守を基準としてそれと比較対照しながら見ていると思います。

松江城天守の基本構造は、二重の大屋根の上に望楼部が載せられたいわゆる望楼型なのですが、その絶妙なバランスによって、日々仰ぎ見る私たちに天守の安定感や重厚さを印象づけてきたと思います。それが、このたびの調査成果とこれに対する各方面からの批判的検証によっては、私たちの固定的なイメージを改める必要があるでしょう。

5. 姿を見せ始めた城下町松江 城下町遺跡の語るもの

城下町遺跡の発掘調査が進められた結果、地下に埋もれた武家屋敷や町人地のありようが浮かび上がってきています。発掘調査は大きく二カ所で進められています。

一カ所は、松江歴史館の建設にともなって行われた調査です。松江歴史館の敷地面積のほとんどが調査範囲とされましたから、市街地でのまとまった調査の規模としては最大のものと言えます。しかも調査地点は、堀尾・京極・松平の三代のいずれの時期にも筆頭かそれに次ぐ重臣の屋敷地ですから、当主やその家族などの公私の生活をはじめとして、さまざまな情報を提供してくれています。また、ふいごの火口が出土するなど、武家地とされる以前の使われ方も興味をそそる成果です。^(注10)

もう一カ所は、県道城山北公園線（通称大手前通り）の改修工事にもなう発掘調査です。これは道路の拡幅工事によるものですから、松江城下の橋北地区を、東西に横断するベルトのように調査地点が設定されています。この中には殿町と母衣町の内山下と呼ばれた中核地域、さらに外堀に沿って配置されていた米子町から南田町も含まれます。

もちろん、個々の調査範囲は狭く、しかも改修工事の進捗状況に追われて調査期間を設定せざるを得ないなど、調査員泣かせの発掘調査となっています。したがって、ベルトのような調査範囲の全容が明らかになるのはまだまだ時間を要しますが、興味深い成果が現れています。たとえば、敷き詰められたウラジロは敷葉工法として現代につながる技術ですし、大畦と無数の足跡とは開府以前の水田景観を彷彿させる発見と言えるでしょう。

むすびに代えて

基調報告でありながら、はじめにお断りしたとおりに、文献・歴史地理分野と土木史分野に厚い報告となってしまいました。城郭史と建築史からの三人の報告と、シンポジウムの記録で補完して下さるようお願いします。

なお、『松江市史』『別編 松江城』の編纂に当たっては、1文献・歴史地理、2城郭史、3土木史、

4 建築史、の 4 分野に分けて、グループごとに調査と研究を進めてもらっています。もちろんそこには各分野の第一線の研究者を専門委員に委嘱しております。別掲の松江城部会委員名簿をご覧いただき、情報や提言を直接あるいは間接的にお寄せくださるようお願いいたします。

(注1) 井上寛司「中世山陰における水運と都市の発達」『戦国期権力と地域社会』1986 所収、「中世西日本海地域の水運と交流」『海と列島の文化 第2巻』1991 所収 など

(注2) 長谷川博史「中世白潟と内海水運」島根県中世史研究会報告 2009 など

(注3) 売布神社文書は現時点では未刊行であるが『松江市史 史料編 中世』に収載される予定

(注4) 東京大学史料編纂所蔵「松浦文書」

(注5) 松尾 寿「島根大学附属図書館所蔵『堀尾時代松江城下図』について」『島根大学附属図書館報 松風』54 1997 所収

(注6) 西島太郎「『堀尾期松江城下町絵図』の制作工程と伝来」『日本歴史』第755号 2011 所収

(注7) 元島根県河川課長塚本隆富氏のご教示による

(注8) 中井 均「織豊系城郭の画期」『中世城郭研究論集』1990 所収など

(注9) 重要文化財松江城天守修理事務所 1947

(注10) 松江市教育委員会・教育文化振興事業団『松江城下町遺跡(殿町287番地)(殿町279番地外)発掘調査報告書』2011